

(経済) ナショナリストを名乗る国家官僚・中野剛志の思想の害毒！

中野剛志の駄本『日本思想史新論』、『TPP 亡国論』を即座にゴミ箱にポイ捨てしよう！

**私** [= **ブログ作成者**] が『**美德冊子2**』の中で「ツマアカスズメバチ集団」と呼んだ中に、西部邁氏（以下、敬称略す）を筆頭とする反米保守を名乗る劣悪極まる思想の一団がある。

今回（第一回目）はこの団員の中の一人で国家官僚

（→外郭団体へ出向しており、今は一時的に公務員の身分ではないから、政治活動OK！副業収入OK！自由自在！などという臆病かつ卑劣な主張をしているらしいが、そんな国家公務員の出向制度を放置してよいのか？と思うが、それは、本論文の論旨には全く影響しないので、国家公務員の悪戯な制度についてはこれ以上触れまい。）

の中野剛志氏（以下、敬称略す）に焦点を当て、その言論・思想の猛毒の害悪について述べたい。

ここでは中野剛志の矛盾に満ちた嘘と煽動だけが一貫している著作『日本思想史新論---プラグマティズムからナショナリズムへ』（以下、「同著」と記す）を取り上げる。

「同著」の論理矛盾は、その著作全体を支配しているので、一つ一つを反駁するために、その政治哲学的な根拠まで細かに示していると一冊の著書となるだろう。

が、そのような作業に多くの時間を浪費できるほど、**私** [= **ブログ作成者**] は暇ではない。

だからここでは「同著」全体に一貫している大矛盾のみを取り上げて批判するが、それだけでも「同著」が愚かな駄本であることが十分証明されるだろう。

## 1. 中野剛志『日本思想史新論』の大矛盾

…江戸日本の古文辞学の引用とそれに対する欧米哲学（思想）による根拠づけ（=接合）など、<古文辞学どおり（道理？）>の大矛盾！

「同著」を一貫する中野剛志の論理を、小中学生でも解るように、ごくごく

簡潔に示せば次のようになる。

すなわち、

- ・ 伊藤仁斎・荻生徂徠・会沢正志斎らの学説の解釈から「攘夷」が導かれる。
- ・ この「攘夷」は、江戸時代の日本人である荻生徂徠らの古文辞学の思想から導かれるのだから、＜日本民族の民族精神（ナショナリズム）＞として正当化してよい。
- ・ そして＜（経済）ナショナリスト＞、＜反米保守＞を自称する中野剛志が意味する「攘夷」とは、「自由主義」とその大国「米国（在日米軍）」の排除を意味する。
- ・ つまり、「自由主義（自由）」排除、「自由貿易（TPP）」締結の排斥、「米国（在日米軍）」排除などの「攘夷」は、古文辞学の＜日本民族の精神＞であるから、日本国・日本国民は躊躇せず、自由主義・自由貿易・親米・在日米軍等々を排斥・排除して自主独立を目指せ！と煽動する。

さて、上記の論理的帰結の本質的意味を中野剛志は明確に述べない。

自主独立（主として TPP 排除・在日米軍排除）と国防（自衛力強化・国民皆兵）の必要性だけに結論を収斂させる。

しかし、中野剛志の言うとおりに日本国・日本国民が成し遂げる自主独立とは、反自由主義・反自由貿易・反米国の自主独立であるから、必然の結果として＜自主独立した日本国が、統制主義の自由なき全体主義国家（共産主義や国家社会主義）となる＞ことを意味するのは自明であろう。

この本質的意味を中野剛志は明確に述べないし、実際には、英米や EU などの自由主義国との同盟・連携を排除すれば、即座に日本国・日本国民はロシアと中共の軍事侵攻の餌食となり、自主独立前にそれ以下の（自由なき）隷属国に転落してしまう現実にも触れない。

さらに言えば、例えばロシアの軍事的侵攻を防衛するには北海道に 10 式戦車何両、対戦車地雷何個ほどが必要かとか、中共の軍事侵攻に対して尖閣の要塞化やどれ程の規模の海兵隊創設が必要かとか、どんな戦闘艦艇・艦載機の建造・購入が必要か等々の具体論に全く触れない。

これで一体、何の「自主独立！」「在日米軍を追い出せ！」「国防国家！」なのか。さっぱり意味不明であろう。

**私** [= **ブログ作成者**] は日本保守主義協会の主催する「**中川八洋**（筑波大学名誉教授）13 名ゼミ（第一回ゼミ）」に出席させて頂いたが、たった数時間のゼミの時間内に**中川八洋**先生は上記すべてについて、明快かつ網羅的に講義された。改めて**中川八洋**先生の偉大さを身に染みて実感した次第である。

余談であるが、近い将来このゼミの受講生の若者の中から、真に偉大な政

治家・官僚、真に偉大な学者の卵が輩出されるに違いない。

**私** [= **ブログ作成者**] は、日本国・天皇（皇室）・日本国民の永続的繁栄を希求する、先見の明と良識ある経済団体や全国の大中小企業の中から、この「中川八洋 13 名ゼミ」に投資する**スポンサー**が現れることを切に期待する。

連絡先は、下記「**中川八洋**掲示板」の【ご意見・お問い合わせ】方法を参照されたい。なお、この提案は**私** [= **ブログ作成者**] 独自の個人的発案であって、ゼミ関係者の誰から依頼されたものでもないの、その点のみ十分御留意願いたいと思う。

→ブログ：[中川八洋掲示板](#)

## 2. 中野剛志の真意（悪意）は極めてシンプル！

「(経済) ナショナリズム」＋「国の独立、国家主権論、国防」＝「自由主義廃絶の全体主義国家への道」のこと。

余談はさておき、本論に戻ろう。

中野剛志によれば、日本人の民族精神は「(支那の) 先王の道」にあるのだと次のように言う、

「(荻生) 徂徠の打ち立てた古文辞学は・・・《先王》が樹立した《道》を記録した書である『六経』を、その(=『六経』の書かれた) 時代における言葉の用い方によって読もうとするものであった。

朱子学など後世の儒学は、《今文を以て古文を視る》ので、名と物、言葉と言葉が指し示す対象とが一致せず、正しく理解することができない。

このため、後世の儒者たちは、勝手な理論を構築して、その理論に従って一通り論理が通るようにして、経書を読もうとする〔弁道 - 11〕。

それゆえ、彼らには《先王の道》を正しく理解することができない。

朱子学は、その方法論から間違っているのである。」

(出典：同著、105 頁)

※ 丸カッコ内と傍点のみ、**私** [= **ブログ作成者**] の補足。以下の引用文においてすべて同じとする。

中野剛志は「同著」の前段でこのように「古文辞学の思想」核心部に触れる。

即ち、伊藤仁斎、荻生徂徠、会沢正志斎らの学説に言及することで「同著」が日本民族の思想に関する著作である、すなわち「日本思想史」であると読者

に印象付けるのである。

しかし、「(支那の) 先王の道」そのものがなぜ<日本民族のナショナリズムの基礎>となりうるのか、そもそも全く意味不明だが、それをここで論じても仕方あるまい。

重要なことは、中野剛志が「同著」でこう記した直後に、<古文辞学の教え(学問方法の根本)>をゴミ屑のようにポイ捨てすることの方である。

「掌を返す」という言葉があるが、掌どころか**私** [= **ブログ作成者**] の体が卒倒してひっくり返りそうである。

こんなに無茶苦茶に論理破綻した思想本には滅多に御目にかかれまい。

なぜなら、「同著」は、伊藤仁斎・荻生徂徠・会沢正志斎らの学説を述べて、それを正当化する根拠に、西欧・英米の政治哲学(思想)を

-----それも、ある思想家の理論体系の枝葉末節部をあたかもその思想家の理論体系の根幹部であるかのように真実を隠蔽・歪曲して-----  
ふんだんに利用(悪用)するというお粗末本(トンデモ本)の類だからだ。

中野剛志は、古文辞学の系譜の「日本の思想」の学説の正当性を、上記の古文辞学の方法論を一切用いず、一切無視して、「近代西洋哲学(思想)」を引き合いにして比較・判定する。

しかも、(経済)ナショナリストを自称する中野剛志が様々な著作の中で常に<自己の結論の根拠>として持ち出す(近代)西洋思想家は、凶悪な全体主義の理論家カール・シュミットやフリードリヒ・リストなどである。

なぜなら、中野剛志の<(経済)ナショナリズム>の目的は、端的に言えば、日本国から英米 EU などの自由主義・自由経済(貿易)の価値観を排除することで、日本国を自主独立の<ヒットラーのナチス・ドイツ(国家社会主義)>や自主独立の<スターリンの共産ソ連>のような全体主義国家に改造すること、あるいは<戦前戦中の対米戦争を志向する軍国主義日本>に戻すことにあるが、流石に中野剛志も、自著の文面に<ヒットラー>や<スターリン>の名称を明示できない。

そんな名を明示すれば「自主独立!」「民族自立!」「(経済)ナショナリズム!」「反米!」等の標語の裏に隠された<自由なき全体主義国家への誘導>という自己の目的(真意)が、中高生レベル程度の文章読解力しかない読者にさえ、バレバレになってしまうからである。その代役として一般日本国民に馴染みの薄いカール・シュミットやフリードリヒ・リストを登場させるのである。

こうして中野剛志の著書の読者は知らず知らずの間に、ヒットラー(国家社会主義)やスターリン(共産主義)崇拝へと毒されていく。

**私** [= **ブログ作成者**] の本論考の目的は、このような中野剛志(ほか西部邁の系譜の論壇人)による、善良であるが無知の日本国民に対する、煽動・洗脳

工作への流れを切断することにある。

さて、カール・シュミットとかフリードリヒ・リストの凶悪な全体主義思想の概要については、例えばハイエク著（『隷属への道』、春秋社、「第 13 章 われわれの中の全体主義」と他の全章）を読むのが理解しやすいので、「全体主義思想の除染剤」として推奨しておく。未読の方は是非購読して頂きたいと思う。

### 3. 日本国の偉大な祖先である荻生徂徠らを（実際は）侮辱する中野剛志！

ここで中野剛志が「同著」で欧米の政治哲学（思想）を悪用している例をいくつか挙げる。次のようなものである。

- (1) (欧米思想の) マイケル・ポランニーの概念と荻生徂徠の言説が一致するから徂徠（の系譜の日本思想）が正しい！？

中野剛志は言う、

「『道』という経験世界には、科学哲学者マイケル・ポランニーが言うように…『暗黙知 [tacit knowledge]』の次元がある。…徂徠もまさに暗黙知について語っている。」(同、107 頁、[ ] 内：中野)

「同著」の前段で中野自身が述べたように、荻生徂徠らの思想の根本は儒学をく先王の時代の言葉>で読み解くのでなければ正しく理解できないのではなかったか？

では、その荻生徂徠の言説を西洋のポランニーの概念で比較・検討するのに何の意味があるのか？全く意味不明。徂徠があので激怒しているに違いない。

徂徠らの日本思想を正当化するために西洋（英米）思想の概念を持ち出すこと自体、中野剛志のいう<日本民族の（経済）ナショナリズム>を真逆さまに転倒した大矛盾ではないか？全く愚かである。

- (2) オークショットの合理主義と一致するから「格物致知」は合理的（主義）なのであるだって？

中野剛志は言う、

「『格物致知』とは、オークショットの言葉を引けば、…合理主義なのである」(108 頁)

あまりにも馬鹿馬鹿しくて笑えてくるのは私 [= **ブログ作成者**] だけだろうか？

- (3) 主流派経済学が想定する（と中野剛志が虚構する）『原子論的「個」』を批

判して、徂徠らの「先王の道」と比較することに、雀の涙程度でも意味があるだろうか？

中野剛志は言う、

「そもそも人間というもの…は〔主流派経済学が想定するような〕原子論的『個』ではなく、…社会的動物である」(同、113頁、〔 〕内：中野)

この中野剛志の説明自体が、嘘・出鱈目である。アダム・スミスを祖とする自由主義経済学者は、個人を原子論的「個（アトム）」などに見做さない。原子論的個（アトム）とは全体主義社会あるいはその直前の社会での個人の状態を表す概念である。中野剛志の説明は意図的な嘘・出鱈目。

(4) H・L・A ハート “法理論” と「礼（式）」・「義」とが対応して関連付けられるだって？

中野剛志は言う、

「(礼と義について) イギリスの法哲学者 H・L・A・ハートの用語を用いて言えば、『礼』とは…」(同、116頁)

「同著」で中野剛志が触れている H・L・A ハートの＜第一次的ルール＞とか＜第二次的ルール＞とかの法概念は一般に区別なく“法”と呼ばれている規範を、「形式的ルール」と「組織的ルール」に峻別するための、ハートの定義であり、「礼（式）」や「義」と比較する意味などない。

ここで中野剛志は「制度としての礼（式）」についてハートの法概念と比較しているようだが、その前に美德としての「礼儀」の定義を新渡戸稲造『武士道』から引用しておくので、中野剛志は制度や法について述べる前に、己の**美德**としての**礼儀作法**を優先して身に付けるべきではないか？

**新渡戸稲造**曰く、

「優しい感情を育てることが、他者の苦しみに対する思いやりの気持ちを育てる。他者の感情を尊重することから生まれる謙虚さ、慇懃さが礼の根源である。(新渡戸稲造『武士道』、三笠書房、59頁)

「礼とは、他者の気持ちに対する思いやりを目に見える形で表現することである」(同、60頁)

「礼儀作法を社交上欠くことができないものとして、青少年に正しい社会上の振舞を教えこむための入念な体系ができあがる。・・・社交上の行儀作法の精

神的意義は・・・礼の厳しい遵守に伴う道徳的な訓練である」(同、61,63 頁)

「(小笠原清務曰く、) あらゆる礼法の目的は精神を陶冶することである。心静かに座っているときは凶悪な暴漢とても手出しをするのを控える、というが、そこまで心を練磨することである」(同、64 頁)

真正の日本人の武士道(美德)としての「礼」とはこういう意味である。

(5) スコットランド道徳哲学派のアダム・ファーガソンをナショナリストと同等扱えるだって？

中野剛志は言う、

「スコットランドの啓蒙思想家アダム・ファーガソンはこう述べている。『古代のギリシャ人やローマ人にとって、個人は無であり、公がすべてであった。近代人にとって、多くのヨーロッパ諸国においては、個人がすべてであり、公が無である』」(同、120 頁)

18 世紀後半のスコットランドの道徳哲学者であるアダム・ファーガソンは、自由の自生的秩序としての法を「人間の行為の結果ではあるが、人間の設計の産物ではない法」として定義したスコットランド道徳哲学派の大思想家である。

ファーガソンが中野剛志、カール・シュミット、フリードリヒ・リストと同類のナショナリストであるかのような世迷言を述べるとは、法螺吹きとしてでもあまりに度を超えていまいか？

ここまでくると、中野剛志とは<真正の悪徳詐欺師>と断定できそうだ。

(6) 「聖」と「共和主義」の比較などしても政治哲学(思想)的な意味など皆無であるし、日本民族の心(精神)とは既に全く無縁の領域！

中野剛志は言う、

「この徂徠の『聖』の概念は、…20 世紀の政治哲学者ハンナ・アーレントの共和主義を彷彿と…」(同、124 頁)

ハンナ・アーレントの思想全体は読むほどに複雑なものなのは事実。

しかし、アーレントが自由主義の米国独立戦争(アメリカ革命)と米国憲法の制定を極めて高く評価した政治哲学者であることは不動の事実。

またアーレントはヒットラーのナチス・ドイツのユダヤ民族迫害から逃れて米国に亡命した人物であるのは周知の事実。

であるのに、中野剛志は「同著」でわざわざアーレントの名を挙げて、シュミットなどの〈全体主義を標榜するナショナリズム〉を志向する〈「同著」擁護〉のために逆利用している。

果たして、アーレントに対する侮辱と悪意なくして、このような真似ができるだろうか？

(6) 中野剛志のナショナリズムとバーク保守主義は水と油。二律背反。中野は決して保守主義者ではないし、保守思想家でもない。中野は明白な極左全体主義者である！

中野剛志は言う、

「徂徠はエドモンド・バークやジョセフ・ド・メストールといった代表的な保守思想家と同じように…」(同、127頁)

英国のエドモンド・バークは「美德ある自由」と「自由の英国国体（憲法・法）」を保守しようとした真正の保守（自由）主義者である。

極左全体主義者の中野剛志がバークを肯定的に述べること自体、バークに対する不敬であろう。少なくとも、中野剛志のような人間こそ、バークが最も嫌う種類の人物（Dr.プライスのような）であることは疑う余地がない。恥ずかしくないのだろうか？

(7) 法と法の支配を全く理解できない中野剛志の、天才ハイエクの政治哲学・自由主義経済学に対する批判などの的外れもいいところ！

中野剛志は言う、

「徂徠の『礼』や『道』の概念は…ハイエクが唱えた『自生的秩序〔spontaneous order〕とは違う。』

ハイエクであれば、当時の江戸時代の商品経済化を自生的秩序として是認するであろうが、徂徠は、これを拒否する。

当時の商品化経済は自然発生的な『自生的秩序』ではあるが、『礼』や『制度』といった良き伝統とは違う。

…ハイエク的な自由主義者は『自生的秩序』たる市場経済の結果として生じた貧富の格差については、これを是正する必要をほとんど認めないだろう。」(同、142頁)

全くの嘘出鱈目。

ハイエクの自生的秩序は経済(学)のみにおける概念ではない。「礼」、「制度」、「伝統」も自生的秩序によって成長するもの。

また、「市場経済の結果として生じた貧富の格差…を是正する必要をほとんど

認めない」などと言うが、ハイエクの全集の中のどこにそう述べられているのかを、中野剛志は明確に説明すべき義務があろう。

少なくとも、中野剛志のこの言い分に対するハイエクの明確な反証は『ハイエク全集「自由の条件〔Ⅲ〕』の中で十分に論述されている。

どうやら、中野剛志はハイエクを全く読んでいないか、読んでも理解できないらしい。

#### 4. そもそも中野剛志に、日本民族の「(経済) ナショナリズム」など語る資格があるのだろうか？

このような、中野剛志の無茶苦茶のこじつけ的な悪徳思想の一体どこから、

- ・真の日本人の美しい心
- ・日本国の祖先らに対する尊敬・崇敬の念
- ・日本民族の自主独立の精神
- ・日本国の国防の（国民の生命・財産・自由の擁護の）義務の精神
- ・日本国、天皇（皇室）、日本国民の永続的繁栄の祈り

などのような“真正の日本的精神”が導かれるというのであろうか？

100%無理であろう。

例えば、本居宣長の古学（国学）は「万葉集（万葉の時代）」に帰って日本人の心を発見しようとしたし、荻生徂徠らの古文辞学派は朱子学を再考して「孔孟の教え」に帰り「先王の道」を再興しようとしたのである。

つまり両学派の思想と手法は異なれども、「江戸時代」の「封建社会」という時代背景の枠内において、日本国・日本国民の心（精神）の復興と永続的繁栄を探求した偉大な祖先たちであったことは同じであろう。

ところが、この中野剛志という人間はどうであろうか？

中野剛志の真意は、これらの祖先らとは正反対の「反日精神の権化」、「反日本国・反日本人」ではないか？

実際にも中野剛志には「同著」で引用している「古文辞学」と「その偉大な祖先ら」に対する尊敬心など微塵も見られない。

これは先に述べたとおり自明。

中野剛志が古文辞学とその学者らを引用（利用）したのは、自由主義日本国を、己の思想信条としての「経済統制主義国家」、「全体主義（＝共産主義・国家社会主義等の）国家」、「軍国主義的ナショナリズム国家」に改造・改変すべく、日本国民を煽動する道具（手段）として必要だったからである。

つまり中野は「何らかの日本思想的カモフラージュ」を「同著」に施さなければ、自己の思想信条を字義通りに「全体主義」、「共産主義」、「国家社会主義」などと表現せねばならず、それでは読者の支持者が得られない。

だから、自己の思想信条を「(経済) ナショナリズム」「民族の自主独立」などと表現して支持・共感を得やすくするために何らかの「日本思想」をカモフラージュとして「同著」のベースとして据える必要があっただけのことである。

こうして、中野剛志が「同著」の前段で荻生徂徠の古文辞学の定義を引用しながら、論理の展開においては、さっさと古文辞学の核心である方法論を投げ捨て、近代欧米政治哲学(思想)を持ち出した理由が氷解するであろう。

ちなみに中野剛志の思想をゆで卵に例えるところなる。

まず、日本思想を装うための古文辞学の言及が「卵の外皮」、次に保守思想家を装うための西洋哲学者の思想への言及が「卵の白身」、最後に中野剛志の真意(本音)としての国家社会主義、(経済) ナショナリズムへの言及が「卵の黄身」の「毒ゆで卵」と言えよう。

特に「同著」の読者が注意せねばならないのは、「ゆで卵の外皮」である「古文辞学の思想」は、食べる前に剥いて、ゴミ袋に捨てて食べないことにある。

すなわち、このゆで卵は食べても日本思想(日本民族)の味など全くせず、西洋哲学(思想)の中の猛毒思想のみを食べることになるのである。

こんな、毒ゆで卵は食べる前にゴミ袋(箱)にポイ捨てするのがベスト。

そう勧めるのが私 [= **ブログ作成者**] の本論考の主旨でもある。

中野剛志は、日本国の偉大な祖先である伊藤仁斎・荻生徂徠・会沢正志斎らの言葉尻だけを、自分の思想信条の正当化のために歪曲して悪用しているだけであるから、古文辞学の学者らを全く尊敬しておらず、実際には侮辱し、嘲笑しているだけ。

この事実は、中野剛志の思想が「反米思想(主義)」である以前に、明白な「反日思想(主義)」である証左である。

「同著」の副題である「プラグマティズムからナショナリズムへ」の「プラグマティズム」には、「同著」の中のどこにも、<この悪用>以上の意味は全く見当たらない。

さらに中野剛志は「同著」で、**福沢諭吉**までも(中野の言う)「ナショナリスト」に仕立て上げる。

もしも墓石の下で眠っている福沢諭吉がこんな出鱈目な創作を聞いたら、烈火のごとく怒って墓から飛び出してくるに違いない。

幕末から明治維新を経て日清戦争に至る激動の時代を生きた福沢諭吉の“(真の) 独立自存”とカール・シュミットの国家社会主義やフリードリヒ・リストの(経済) ナショナリズムを同列に扱うなど反日極まる愚行であろう。

日本国の祖先に対する、中野剛志の傲慢不遜な著作群と言論活動の害悪は度を超えており、正しい言論によって糾弾されねばならない。

これが私 [= **ブログ作成者**] に本論考を書かせた動機である。

## 5. 中野剛志の自由貿易批判は、無知と出鱈目の極みであり、信ずるに値せず！

福沢諭吉までもをくナショナリスト>と決めつける「同著」の件の一節で中野剛志は言う、

「貿易は国民に利益をもたらすものではあるが、その理由は、経済学における自由貿易論のように、国際的な財の交換による世界全体の資源配分の効率化にあるのではない。その国の知識レベルを向上させて国力を高めるので、有益なのである。…その意味では、戦争も同じである。国は戦争を行うにあたって文明を学ぶことになるし、また国の独立を守るための戦争もある」（同、203頁）

事実は全く逆さま。

どの国にとっても、その国の国力を高める（財や貨幣の蓄積・配分も含む。個人もまた同じ。）ためには自由貿易（自由市場・市場原理）が最も効率が良いという歴史事実があったからこそ、「それがどうしてなのか？」を、人間の知力で捉えるために、経済学という一つの学術手段を使って分析してみたら、それが世界の諸国民の資源配分（＝自国民の資源配分も含めて！）を分業などで効率化しているからだ！とその一端を人間は発見したのである。

世界の経済学者らの常識であろう。

例えば、ミルトン・フリードマンは明確に述べている、

「アダム・スミス以来、他の問題に関してのイデオロギー上の立場がどんなものであったにしても、自由な国際貿易こそが通商国だけでなく世界全体のためにとって最善の利益になるという点に関しては、すべての経済学者が事実上の完全な意見の一致をみせてきた」

（出典：M・フリードマン『選択の自由』、日本経済新聞社、65～66頁）

だが、中野剛志とは世界の大経済学者の常識よりも自己の論理が正しい！と誇大妄想する。

そもそも、国際貿易において、国家間での財・貨幣などの効率的な交換なしに、どうやって「その国の知識レベルを向上させて国力を高める」ことが可能だというのか？

そんな方法を人類は未だかつて発見していない。

## 6. このような出鱈目屋、中野剛志の『TPP 亡国論』こそ、亡国論ではないか？

冷静で正しい思考ができる良識的な日本国民であれば、このような嘘つきイ

デオログ中野剛志の著作『TPP 亡国論』などゴミ箱にポイ捨てするに違いないだろう。が、ここでは『TPP 亡国論』の中身に触れている余裕はないので別の機会にしよう。

ところで、「同著」や（特に）『TPP 亡国論』で自由主義、市場経済ならびに自由貿易を激しく否定する中野剛志であるが、実生活の中で中野剛志自身はそれらの恩恵に依存していないのか？という率直な疑問が、誰にでも湧いてくるであろう。

中野剛志は自由貿易あるいは市場経済（自由市場）の原理を利用せずに、「同著」や『TPP 亡国論』を執筆し、販売しているのだろうか？

答えは、No!である。

そんなことは不可能であり、実際にも中野剛志がそうしていないことを読者の誰もが知っているではないか！

中野剛志は自著を執筆するための鉛筆 1 本、消しゴム 1 個でさえ、自由経済（市場原理）の分業など利用せずに入手できたのか？

況や、紙とか PC とか、あらゆる物の入手をや！である。

中野剛志は鉛筆、紙、パソコンなどを自分で自家製作して使用しているというのなら証拠を見せて欲しい。いや、そうではないと誰もが知っている！

誰もが、中野剛志の著書が市中の書店に山積みされ、あるいはインターネット上で売買されている事実を知っている。それは自由市場（市場原理）を利用しているということではないか？

さらに、中野剛志に伺いたい。

市場原理（自由市場）以外の方法で、どうやって自著を販売できるのかその方法ぜひ御教示頂きたい。

書店やインターネット上で自著の販売ができないなら、普通は各家庭や知人宅を訪問して販売（＝1対1の売買交渉の意味）するだろう。

一人一人の買い手を訪問して回るのは、やる気になれば可能である。

しかし、中野剛志の著書と買い手の貨幣の交換取引（＝1対1の売買交渉・決定）はどのように行うのだろうか？

この売買交渉時に、中野剛志が「市場原理以外の方法」で相手に自著を買わせる（＝財と貨幣の交換をする）方法は唯一つしかあるまい。

それは買い手か売り手の一方が、相手の自由意志を無視して＜強制力を使用して自己の意志に従わせる方法＞のみである。

市場原理とは財・貨幣で表現される価値に関する自由意志に基づく交換のことである。

だから、買い手または売り手の一方が、価値交換の比率に合意できず、No! と言えば、交換交渉は成立しない。また、この交渉不成立を両者が承認することを前提（＝厳守すべきルール）としている。

この単純明快な価値交換が市場原理の基礎であるが、難しく考えなくとも、我々が日常生活の中で「普通の買い物をするやり方」を思い起こせばよいだけのことである。そして市場原理を無視した＜強制力使用＞の一例は、＜万引き＞や＜強盗＞などである。

「ジャンケン」や「クジ引き」で決めるという方法もあるように見えるが、それも結局は、「お互いの自由意志による合意」が基礎になっていることは自明であり、市場原理の枠内である。

ただし、市場原理（自由市場）による交換といっても「取引の公正さ」を担保するために守るべきルールがあり、それを逸脱する禁じ手は許されない（＝法の遵守義務）。すなわち、自由市場（自由貿易）とは、＜自由放任＞を意味しない。

このように、自由市場や市場原理を否定すれば、人びとの日常生活におけるすべての商取引が即不能となり、すべての商取引の不能は、日常生活における他の行為（活動）の自由のすべてを即座に不能に導くことが容易に想像できるであろう。

**ハイエク**は次のように述べている。

「多くの人々は、経済生活に行使される（統制・計画の政府）権力は、（人生の高次元の問題ではなく、経済上の気がかりの解決という）二次的な重要性しかない事柄に向けられていて、経済目的を追求する自由を脅かすようになることは少ないだろうと信じ、安心しているのだが、残念ながら、それは全く根拠の無いものだ。というのもその考えは、経済目的というものは他の人生の目的とまったく独立に、純粹なものとして存在するという誤った信念に大きく基づいているからである。」

（出典：ハイエク『隷属への道』、春秋社、113頁）

「経済計画（統制）によって発生する問題は、その時われわれは、様々に重要性の異なる必要を、好きなやり方で満足させることが可能かどうか、ということにとどまるものではない。それは、重要かそうではないかを判断するのはわれわれ自身なのか、それとも計画者によって決められるものなのか、という問題なのである。経済計画は、『単なる』経済問題と軽んじられている、精神（＝高次の目的）にとっては周辺の（＝低次の目的）であるような事柄のみを左右するものではない。それは、実際には、何が周辺の（＝低次）であるかを定めることが、もはや個人には許されなくなるということの意味する」

（出典：ハイエク『隷属への道』、春秋社、113頁）

すなわち、中野剛志は自身のナショナリズムに〈経済〉を冠して、〈(経済)ナショナリズム〉と言うが、それが政府による統制(計画)主義的な経済を意味する限り、ハイエクが言うように、個々人は経済的自由のみならず、すべての個人的自由を失うことになるのである。すなわち、中野剛志が〈ナショナリズム〉に冠する〈経済〉の修飾語もまた、〈一切の個人的自由なき全体主義〉を標榜する中野の真意をカモフラージュする道具にすぎないことが理解できるだろう。

7. 自身は、公務員の外郭団体への出向制度と自由主義(市場経済)を利用して自由に発言し、自由にお金を稼ぎまくり、自著の読者ら(日本国民)に対しては自由主義・自由貿易を拒否・放棄するよう煽動する中野剛志とは究極の卑怯者ではないか!

ところで、中野剛志本人は市場経済(自由市場)を最高度に利用して自著を販売して大いに金儲けをしているのは周知の事実。

自著の販売だけではない。

インターネット回線や携帯、PCを利用したTV出演や言論活動なども、自由主義と市場原理の擁護なしでは全く不可能である。

それなのに、中野剛志は、(自由市場を利用して販売した)自著の読者や自分がインターネットで出演している番組の視聴者らに向かつては、(まさに今、自由市場を利用しながら)「自由貿易(自由主義)は悪だ!」、「市場原理は富の効率的分配をしない!」、「TPPは米国の日本支配の罫である!」、「反米・反自由主義を目指せ!」、「TPP亡国論!」などと絶叫して、「自由市場」「自由貿易(TPP)」「自由主義」を悪者として、日本国から排除せよ!と煽動している。

中野剛志とは何と矛盾に満ちた、身勝手かつ卑劣な男であろうか!と怒りを感じるのは私 [= **ブログ作成者**] だけだろうか?

中野剛志の〈(経済)ナショナリズム〉や〈TPP亡国論〉の論理がいかなるものであれ、この事実(中野剛志自身の矛盾)だけは、決して枉げられないし、否定もできない、公然の事実であろう。

8. 日本国・天皇(皇室)・日本国民の永続的繁栄のため、真の日本人の美しき心の再生のため、あなたは、中野剛志の(経済)ナショナリズムとハイエクの自由主義(政治哲学・経済学)のどちらを選ぶか?

もはや、この問いに関する答えは自明であろう。

ハイエクは、中野剛志の主張するような強制力による経済統制が、政府権力に国民を従属させる手段となり、諸国民の間の私的な経済関係で行える事柄を

国家間の力と力の関係に変換してしまい、相手国を力で支配する戦争や侵略行為の根本原因となると述べている。

**ハイエク**曰く、

「競争社会における選択の自由とは、ある人が（自分の）要求を満たしてくれない場合他の人に求めることができる、ということに依存している。

ところが、生産者が一人なら、われわれはその者の言いなりにならざるを得ない。

前経済システムを統制する当局は、考えうる最強の独占生産者である。…生産と価格に対する統制によって得られる権力は、ほとんど無制限のものである。」（出典：ハイエク『隷属への道』春秋社、118頁）

また**ハイエク**曰く、

「自由主義体制と全体的計画体制の最も対照的な違いは、ナチスや社会主義者が『経済と政治が人為的に分離されている』と非難し、また、両者とも、政治が経済を支配するよう求めている点に、特徴的に表われている。

このような主張は単に、自由社会では政府の政策に含まれていない目的のために（私的な）経済活動がなされることが許されている、ということに非難しているのみではなく、（私的な）経済活動が政府の統制から独立して展開され、政府の容認しないような目的に向けてもなされていることを非難しているであろう。

だが、彼らがそれに反対して主張しているところを実現すれば、単に権力が一つになるということにとどまらず、単一の権力、つまりは支配する集団が、すべての人の目的を統制し、とりわけ各個人が社会で占める位置を決定する完全な権力を持つ、という結果をもたらすことになるだろう。」

（出典：同、139～140頁）

さらに**ハイエク**曰く、

「市場や原資源を求める（私的な）自由な競争に代えて、国家なり組織集団なりの間での交渉で事を処理していけば、国際摩擦は減少するだろう、というのはもっとも致命的な幻想の一つでしかない。

自由競争制度の『闘争』というのは抽象的な表現にすぎず、逆に（私的な自由競争に任せない）国家なり集団間の『交渉』というのは実はそれぞれの力比べなのだが、この主張は前者（＝自由競争）に代えて後者（＝力）を用いよと

主張しているのである。

そして、力に訴えることなく解決できる諸個人間の競合関係であったものを、上位の法に従う必要のない、強力で軍事力を持った国家間の闘争へと変えようとしているのである。

それらの国家は、自らの行動を誰にも審判されず、従うべき上位の法も持たず、自国の直接的利益しか考慮する必要のない代表者によって運営されるものである以上、国家間の経済取引というものは、最後には力と力の衝突に終わらざるを得ない」

(出典：ハイエク『隷属への道』、春秋社、305～306頁)

まさに、ここでハイエクが主張していることこそ、中野剛志の(経済)ナショナリズムの真の目的であり、中野剛志が強調して煽り立てる「自主独立」「国防国家」の標語とは、この「無法者の力(武力)」の意味でしかない。

#### □ まとめ.

中野剛志の「(経済)ナショナリズム」とは日本国・日本国民に対する「全体主義への勧め(煽動)」であり、真の日本民族の精神から大きく外れ、美德ある明治以前の日本民族たる祖先の心を冒瀆し、かつ現在及び未来の日本国・日本国民を亡国の淵へ導こうとしている。

この悪徳思想を決して野放しにせず、糾弾して排除せねばならない。

良識ある日本国民は、中野剛志の「同著」および『TPP 亡国論』(という亡国煽動本)のほか、中野剛志の著作すべてを、今すぐ冬の焚火や焼き芋づくりの原料として燃やしてしまうか、ゴミ箱にポイ捨てしよう!

全国の真正保守(自由)主義グループの賛同者は、安倍晋三内閣に「早急なるTPP交渉の妥結」を要求しよう!

安倍内閣(女性)閣僚の不祥事などで苦しむ自民党が、来年の統一地方選挙で起死回生できる即効性ある手段はいくつかある。

その中でも効果が大きいものの一つが「統一地方選までに、TPP 国家間協議をまとめ上げ、掛け声だけでない現実の妥結に至ること!」であろう。

もし安倍内閣がこれを成し遂げれば、統一地方選はギリギリ自民党の勝利、成し遂げられないならば自民党の大敗となるのではなかろうか?

単なる予想にすぎないが…。

以上。

